

### 言語表現から見る日中文化の相違—授受表現 を中心に—

寧, 寧

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化 / 異文化

(巻 / Volume)

13

(開始ページ / Start Page)

199

(終了ページ / End Page)

208

(発行年 / Year)

2012-04

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007867>

# 言語表現から見る日中文化の相違 —授受表現を中心に—

法政大学大学院国際文化研究科 M 1

寧寧

\*本稿は、国際文化情報学会における研究発表（2011年12月6日）の概略紹介です。紙幅の関係上、論考を裏付ける論証部分や詳細な注など、大幅に省略しておりますことをご了承ください。

## 序章

### 第1節 研究動機と背景

大学の時、日本語を学習して、習得が困難だったものの一つに授受表現がある。授受表現は日本語においては、話し手、与え手、受け手の人間関係、つまり、上下関係やウチ・ソトの関係、恩恵・義理の様々な要素で使い分ける<sup>1</sup>。日常の活動において、モノやサービスを交換する場合に使用される言語表現は使用頻度が高く、日本語学習者にとって習得や運用が難しく、時々間違っ使用されると、誤解を引き起こすことがある。また、同じアジア系の日本人と中国人の外見はあまり区別がつかない。しかし、私は日本へ来て、実際に日本人と交流してみるとやはり見分けることができる。外見とは違って、習慣や考え方、感受性や人と人のかかわり方など、実に異なる点が多いのである。世界のさまざまな民族や国家が、その歴史を通じて築き上げてきた文化、その精神世界は、それぞれ固有の民族の言語に写しだされている<sup>2</sup>。即ち、言語は文化の産物であり、深い文化的な意味を内包

している。従って、言語を習得する時はその背景となる文化も重視すべきであると思われる。

21世紀の社会は情報化され、国際化してきて、言語や文化背景の違う人たちも頻繁に接触するようになった。日本は中国の一衣帯水の隣国として、わが国と（現在は特に経済の面で）密接に結ばれている。出身地である遼寧省は中国東北部の政治、経済、文化の中心地として、また、歴史的な背景の関係で、日本語教育が盛んな地域の一つである。特に、この数年、大連市、瀋陽市に投資した日本企業は大幅に増加して、日本へ留学する人数も増加し、遼寧省は中国で日本語教育が盛んな地域の一つとなっている。今後の日本語学習者に対して、コミュニケーションがうまくできるために、日本語に関わる文法の正確さばかりでなく文化理解能力を高めることで言語運用力を向上させることが重要だと考える。

次の段落では、言語教育と文化の関係についての議論を整理しておきたい。

文化庁は平成11年3月に「今後の日本語教育施策の推進について——日本語教育の新たな展開を目指して——」と題する報告書<sup>3</sup>を公表した。この報告書の中で、日本語教育の今後のあり方として、次の四つの基本的な考えを提示している。

- 1) 「コミュニケーション言語としての日本語教育」
- 2) 「文化発信の基盤としての日本語教育」
- 3) 「情報化社会における日本語教育」
- 4) 「日本語教育行政を取り巻く状況」

日本語教育と文化との関連について、上述の2)の「文化発信の基盤としての日本語教育」の中で：

- ① 言語は、「コミュニケーションの手段である」、「その言語を用いる民族や集団の文化的同質性の基盤を成すもの」

- ② 「言語・文化の交流は双方向性を持つこと」すなわち言語・文化は相互的な相対主義に立つものである
- ③ 「国際社会の中で我が国への理解を深め、諸外国と共存していく上で、対外的な文化発信を積極的に行っていくことは極めて重要である」

として世界共存のための文化発信の必要性という三つの方針を打ち出している。

以上のような「日本語教育の新たな展開」として盛り込まれたことは、日本語教育が国外と国内で大きな変化を迎えた現在、これまでの日本語教育への反省に立って、日本語と文化の不可分の関係を、今までより、一層明確に日本語教育の内容と目標として位置づけたものと理解される<sup>4</sup>。

また、ソシュールの構造主義文法とチョムスキーの変形生成文法の影響で、長期にわたって、中国の日本語教育と研究はそのほとんどが日本語の内部形式、例えば音声、文法、語彙に限られていた。しかし近年来、日本語教育のかつてない発展及び外国の新しい文法理論の導入により、多くの日本語教育者は言語の社会機能に目を向けるようになってきている<sup>5</sup>。

## 第2節 先行研究

研究対象の分析をするに当たって、原田登美の『一「日本語会話データベース（上村コーパス）」に見る一日本語会話における「授受表現」の使用実態とポライトネス・ストラテジー』（2007）<sup>6</sup>の分析を先行研究として参考にする。

まず、原田は『恩恵・利益を表す「授受表現」と「敬意表現」の関わり一特に「てくれる」を中心として文法的側面と社会言語学的側面から見る一』（2006）<sup>7</sup>では、「授受表現」を以下のようにまとめて

いる。

「〈授受表現〉は、常に話し手を中心とした方向性を語彙的に内在し、話し手から見た動作・行為の方向性を示しながら聞き手や参与者に対する話し手の主観的な関わりを示す表現である。」(2006、203) また、「日本語〈授受表現〉は相手からの恩恵や相手への負担を言語の上で差異化して表すことにより、話し手が聞き手や参与者に対する「気配り」や「配慮」を示す意味と機能を持って、語用においてその機能を適用して用いられているものである。」(2006、216)

次の段階として原田は上村コーパス<sup>8</sup>を用いて、授受表現の使用実態を調査しデータ収集を行って分析している。

それによると、「ていただく」の使用率が高いが、それは、「ていただく」の視点が話し手にあることから「自己同一視化」すなわち「共感度」が高く、話し手からの心理的な近さから敬意意識が低減して常体化しているためだと考えられる(原田、2007、137)。

また、女性の丁寧表現は男性の使用意識とかなりかけ離れて、いかに丁寧に表現するかを常に強く心がけているとしている(原田、2007、137)。

確かに、原田の研究で取り上げられている例を分析する通り、現代の日本語コミュニケーションにおける配慮が上下の対人関係を意識した敬語よりは、話し手が自分を中心として恩恵の授受関係がどの方向でなされるかに重きを置き、主として聞き手への配慮を優先してなされている。また、男性と女性の丁寧さの意識にはかなり距離とズレがあり、女性の丁寧さへの意識が言語表現に反映されていることが見て取れる。日頃、コミュニケーションの難しさを実感し、円滑な人間関係を作り上げることに心を砕いている女性の表現意識の反映かと思われる。しかし、単に日本社会・文化を外国人向けの日本語教育に取り入れればよいというものではなく、学習者の社会・文化的背景をも

対象として考慮していかねばならないと考える。原田は日本人としての視点で自文化に対し認識から分析しているのに対し、本論文では先行研究を踏まえて、異言語異文化の学習者としての視点で授受表現を検討していきたい。また、原田が使用している上村コーパスではフォーマルな場面しかないので、授受表現の使用実態に対する研究が欠けているため、本論文では日本人同士が日常生活における授受表現の使用実態も考察する。

### 第3節 研究課題

言語には、個々に使用している言語の歴史的な背景からその言語独自の表現や意味、用法に特徴的な展開があり<sup>9</sup>、すなわち言語には各自の文化の行動様式や価値観がある。それ故に、日本語学習者が授受表現の習得が難しいのは授受表現に関する各自の文化の行動様式や価値観が違うのではないかという仮説が立つ。以上の仮説を立証するために、以下の調査を行う。

第1章では、日本語学習者が授受表現の習得の困難に関して検討する。日本人が相手との人間関係を重視して話していることを明らかにする。つまり、内外意識と上下意識から生じた内外関係と上下関係が行為で表現されるばかりでなく、言語でも明確に表現される。日本語学習者の学習と習得状況を考察する。次の段階、第2章では、日本語母語話者と学習者のコーパス資料を用いながら、双方の使用実態から見られる特性を浮き上がらせていく。また、先行研究では言及されていない日本人同士が日常生活の授受表現に関する使用実態についての考察を加える。それらを踏まえ、第3章では、授受表現に内包される各自の文化の行動様式や価値観の相違を明らかにしていきたい。

## 第1章 日本語教育における授受表現

### 第1節 学習の状況

授受表現をめぐる日本語の特徴としては、7種類の授受動詞の使い分けと授受動詞が補助動詞としても使われるという二つの点あげられる。

7種類の授受動詞の選択には、与え手と受け手の人間関係や話し手と与え手あるいは受け手との人間関係、話し手と聞き手との人間関係、話し手の視点などを考慮しなければならない。即ち、「誰が誰に」の授受の方向づけと話し手の視点による適切な授受動詞の選択が要求される。日本人なら「日本語」が話せるのは当然であり、授受動詞の使い分けは日本人には当たり前のことであり、ふだん意識にのぼることはほとんどないと思われるが、異言語異文化の日本語学習者にとっては、習得が難しい項目である。

例えば、日本語では「私」の立場により、「あげる」と「くれる」の使い分けがなされる。

例：(1) 私は A さんに本をあげた。

(2) A さんは私に本をくれた。

中国語で、「給」が「私」の立場に関わりなく用いられる。

(「給」は中国語の授受動詞である、「我」 = 「私」)

例：(1") 我 給 A 書。

(2") A 給 我書。

### 第2節 習得の状況

授受動詞が補助動詞としても使われるという点もあげられる。授受動詞がほかの動詞の「て形」に付いて「補助動詞」になり、特定の

行為によって恩恵がもたらされたこととしてよく使われている(原田、2006)。

例：「私を信じてくれているお母さんがいる。」(一リットルの涙 第2話)

「先生、夜分に対応していただき、ありがとうございました。」(フリーター、家を買う 第5話)

「教えていただきたいことがあるんです。」(大切なことはすべて君が教えてくれた 第3話)

日本語では、「お世話になった」場合は、それに対する感謝の気持ちを明確に表現しないと自然な表現として成り立たなくなるというわけである。しかし、山田は「日本語においては、受益者の立場に立ったときは「～てくれる」、「～てもらう」を使い、相手に対する感謝の気持ちといった恩恵性を表す表現は、中国語には見当たらない」<sup>10</sup>としている。山田が述べているように、中国語では恩恵性を表す表現がなければ、日本語の授受表現に対する中国語話者がどう認識するかという疑問が生じてくる。日本語が中国語に訳される際、本節では小説における授受表現を中心に、授受表現をどう表現しているのかを考察する。村上春樹の『1Q84』の日本語版と中国語翻訳本<sup>11</sup>を使用し、授受表現に関する部分の分析を行う。

例 「一時的な避難先です。数多くはありませんが、そのような場所が篤志家によっていくつか提供されています。中にはアパートを丸ごと一棟提供して下さった方もおられます」 P 81

“临时避难处。虽然不多，但总算有几处这样的地方，是由慈善家提供的。其中有人提供了整整一幢小楼。” P 50

## 第2章 授受表現の使用実態

本章では、日本語学習者は授受表現の習得が難しいと言えるだろう。それゆえに、日本語学習者（中国）がうまく納得できない可能性が高いので、本論文に言語コーパスを用いて日本語学習者（中国の大学生）の日本語を使用する実態（授受表現を中心に）を考察する。同時に参照としての日本語母語話者の授受表現を使用する実態も考察する。以下の3節で分析を述べる予定である。

**第1節 上村コーパス：日本語母語話者のデータ（上村：1997, 65）**

**第2節 杉村コーパス<sup>12</sup>：日本語学習者のデータ（杉村：2012、4  
公開予定）**

**第3節 ドラマセリフのデータ**

## 第3章 日本と中国における対人関係の比較

第3章では、こうした事例を基に分析を行う上で、日中両国母語話者がどのような対人関係の把握をしているのか、どのような社会規範に則って適当に発話して、どう表現するのかについてアンケートを通して考察する。各自の文化の行動様式や価値観の相違が鮮明にみえてくるのではないかと指摘したい。

内外意識と上下意識が生じた内外関係と上下関係の対人関係に対して日中両国の大学生の理解を調査する。それに対する意見を収集する。

方法：アンケート

内容：対人関係の理解

対象：①日本語話者	50
②日本語学習者（中国）	50
③中国語話者	50

## 第4章 まとめ

今回の学部学会の発表では、現在書き進めている修士論文の内容と研究方法を概説した。まとめはまだ着手しないので、ここではオープンのままとしたい。

### 注

- 1 門和沙日娜「日中対照研究 授受表現」、『昭和女子大学大学院言語教育・コミュニケーション研究 1』、2006年、53～63頁
- 2 藤本和貴夫「言語文化学の現在」、『言語文化学の可能性—現在と未来』、国際シンポジウム 1996
- 3 [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/nc/t19990319001/t19990319001.html](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t19990319001/t19990319001.html)
- 4 原田 登美「日本語教育と文化の交差点：異文化コミュニケーションの視点から」言語と文化 4、2000-03-15、120～131頁
- 5 陳岩「異文化間コミュニケーションにおける文化能力養成について：中国の日本語教育を例として -」、『北星学園大学経済学部北星論集 39』、2001-03、93～101頁
- 6 原田登美『-「日本語会話データベース（上村コーバス）」に見る—日本語会話における「授受表現」の使用実態とポライトネス・ストラテジー』言語と文化 11、2007-03-15、117～138頁

最優秀賞受賞研究

- 7 原田登美『恩恵・利益を表す「授受表現」と「敬意表現」の関わり—特に「てくれる」を中心として文法的側面と社会言語学的側面から見る—』言語と文化 10、2006-03-15、203～217頁
- 8 <http://www.env.kitakyu-u.ac.jp/corpus/>
- 9 氏家洋子『言語文化学の視点—「言わない」社会と言葉の力—』おうふう、1996
- 10 Yamada,Toshihiro「Some Universal Features of Benefactive Construction」『日本学報』15、大阪大学日本学、1996
- 11 村上春樹『1Q84 book 3』10月-12月 新潮社、2009.5  
施小炜訳『1Q84 book 3』10月-12月 南海出版社、2011.1
- 12 <http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~sugimura/class/corpus/ludong.html>